

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム  
—アジア・アフリカ持続型生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築—  
報告書

中部アフリカ熱帯林住民の生活史に関する比較研究  
—貨幣経済の浸透と生業戦略の多様化—

派遣者：大石高典

派遣期間：2013年9月1日～10月31日

派遣先：アメリカ合衆国・ワシントン州立大学バンクーバー校（アメリカ合衆国）

キーワード：文化のミクロ進化とマクロ進化，配偶者選択，狩猟採集民研究，焼畑農耕民研究，コンゴ盆地北西部

1. 研究課題について（400字程度）

本研究では、グローバル化に伴い、生業や社会にドラスティックな変化が見られる中部アフリカの森林住民のうち、外部社会との接触のあり方が対照的なコンゴ盆地北西部の2つの地域、とくにカメルーン東南部地域と中央アフリカ共和国南部地域からコンゴ共和国北東部を取り上げ、これらの地域に居住するピグミー系狩猟採集民（バカ人とアカ人）と焼畑農耕民（バクウェレ人とンガンドウ人）について、人口動態、親族関係、土地所有、移動性、配偶者選択、産子数などについて蓄積された一次資料に基づいて、生業活動の多様化や定住化に伴うライフスタイルの変化が、彼らの生活史戦略にどのような影響を与えているのかを定性的／定量的に検討することを主眼とする。両者の最も大きな相違は、バカ人が近隣農耕民を媒介とせずに外部社会と直接交渉を始めているのに対し、アカ人の外部社会との接触は、近隣農耕民の媒介のもとに限られていることである。

2. 派遣の内容（400字程度）

今回の派遣では、受け入れ研究者であるバリー・ヒューレット教授、およびエドワード・ヘイゲン准教授の指導のもと、すでに手元にあるバカ人とバクウェレ人における配偶者選択嗜好性についてのデータの解析を行った。並行して、派遣期間中に開講されたヒューレット教授担当の大学院の授業「文化の進化人類学」を受講した。9月中旬にはワシントン州立大学の本校があるプルマン・キャンパスを訪問し、コートニー・ミーハン准教授らアフリカ研究グループのメンバーに面談して研究紹介と共同研究の可能性についてミーティングをもった。10月23日には進化人類学グループの研究セミナーにて、このテーマについて研究報告を行い、今後の分析と考察の方向性について議論を行った。10月28日には、今回の滞在中に執筆・投稿した英語論文の一つである「ゴリラ人間と人間ゴリラ—アフリカ熱帯林における人=動物関係と民族間関係の混淆と自然保護」の内容について、ワシントン州立大学の人類学関係の教員と学生、それに人類学に関心を持つバンクーバー市民を構成員とするリバー・シティーズ人類学協会において講演を行い、討議を行った（写真1）。



写真 1: リバー・シティーズ人類学協会における講演会の様子。

### 3. 派遣中の印象に残った経験や体験 (800 字程度)

ヒューレット教授の文化のマイクロ進化とマクロ進化に関する演習では、折々にレクチャーを挟みながら、毎週 5-6 本の原著論文を参加者が要約し、各自の研究テーマと結びつけつつ議論をしてゆくというスタイルで、毎回繰り広げられる参加者間の自由な議論に刺激を受けた。ヘイゲン准教授の主宰する進化人類学研究セミナーでは、テレビ会議システムを用いて博士課程大学院生を中心とする研究の進捗状況の報告と、とくに理論的な検討が行われていた。どうしたらもっと面白くなるか、大学院生間で議論を盛り上げる雰囲気が印象的であった。

今回、1 週間足らずの短期間であるが、プルマン・キャンパスを訪問することができた。プルマンは、オレゴン州との州境にあるバンクーバーとは反対側のアイダホ州との州境にある大学都市である。バンクーバーからは、ポートランド、シアトルを経由しての空路での移動か、路線バスを利用しての 10 時間以上の移動を要する。広大なキャンパスの周囲 360 度を小麦畑に囲まれた環境にはびっくりさせられた (写真 2)。



写真 2: ワシントン州立大学プルマン・キャンパスを囲む小麦畑。

プルマン・キャンパスでは、文化人類学、考古学、進化人類学の 3 つの分野全ての構成員が同一の独

立した建物に研究室を持っており、それぞれの分野間で、緊密な研究交流がある。また、小規模ではあるが一般に公開された博物館も併設されており、気軽に構成員の研究成果に関連した展示を見ることができるようになっている（写真3,4）。



写真3: 人類学部に併設された展示室.



写真4: 中央アフリカ共和国南部のアカ・ピグミーの狩猟用の網などが展示されている。

アフリカ研究グループは、上記3分野にわたって活発に活動を行ってきている。ワシントン州立大学は、エチオピアのハワサ大学との教育・研究協定を結んでおり、プルマン・キャンパスではエチオピアからの教員3名が長期滞在研究を行っている。派遣期間中、プルマンとバンクーバーの両キャンパスでは、学内外の研究者による通算6回のアフリカ研究に関する学術講演会があり、それらの全てに参加することができたのは幸いであった。

#### 4. 目的の達成度や反省点（400字程度）

今回の派遣では、カメルーンの調査地でこれまでに得られている配偶者選択嗜好性に関する聞き取り調査データについて、これまでに試みていた質的な分析に加え、定量的な分析を進めることができた。分析の予備的結果について、研究セミナーで報告を行い、今後の解析の方向性について助言を得ることができた。その結果、新たな視点でデータを見直し、発見の位置づけを行うことができた。当初目的とした、このテーマに関する英文論文執筆・投稿にまでは至らなかったが、帰国後も作業を継続して今年

度中の投稿を目指したい。一方、もう一つの課題であった、同じくカメルーンの長期調査地で継続的に取得している狩猟採集民、農耕民両集団の縦断的な人口学的データの解析については、これまでに構築したデータベースの紹介にとどまり、作業を進めることができなかった。これ以外に派遣期間中、英文論文1件、和文論文2件と短報6件を完成させ、それぞれ査読付き海外学術誌と国内学術誌・一般誌等に投稿したほか、今年度提出予定の博士論文の執筆作業を並行して進めた。

#### 5. 今後の派遣における課題と目標（400字程度）

アメリカにおいても、日本と同様、文化人類学と進化人類学との距離は遠い。また、進化人類学の中にも、人間行動生態学、進化心理学など異なる考え方のアプローチがいくつもある。その中で、ヒューレット教授の提唱する「進化=文化人類学（Evolutionary Cultural Anthropology）」は、とくにこども期における文化の伝達プロセスに焦点を当てて、文化人類学と進化人類学の双方の架橋を視野に入れた折衷的なアプローチを模索している。文化の自然史的な記述はマクロな進化の理解に重要だが、それだけでは文化が生まれ、維持され、継承されるメカニズムは見えてこない。ミクロな文化進化への研究アプローチは、本研究課題の問題とするアフリカ熱帯林住民の文化変化と生活史の関連についても応用可能であると考えられる。今後、今回の派遣で得られた成果を糸口に、文化変化に関するミクロなメカニズムの検討へと研究を展開させてゆきたい。

なお、当初研究計画で予定していた中央アフリカ共和国の調査地におけるフィールドワークは、今春以来の同国の内戦状況に収束のめどがつかないため、実施できない状況となっている。今後数年は同様の状況が続くものと考えられ、今後の本研究課題のためのフィールド研究は、従来の調査地であるカメルーンとコンゴ共和国北西部を中心に行う予定である。